

自然生活

S h i z e n S e i k a t s u

Vol.4
June 2005



一本の木との出会い 「めいちゃんちの星見台」をめぐる

二〇〇五年初夏、郡山に棟の家が完成した。「めいちゃんちの星見台」と名付けられたその家には、施主はもちろん、建築家や林業家など、四人の男たちの並々ならぬ思いが込められていた。それぞれ職種や立場は違えども、安価な輸入材に押される日本の林業と故郷の山林を守るために『地産地消』の家づくりを続ける彼らの活動についてレポートする。

特集 「地産地消」の家づくりを目指して

ある家族が、郡山にある建築家・遠藤隆吉さんの事務所を訪れた。お母さんの陰に隠れて、二歳くらいの女の子が立っていた。その子は「めいちゃん」と言った。その日は、遠藤さんが設計したその家族の家で使用する木を、南会津郡田島町の山林へ探しに行くことになっていた。

有志と共に「ふくしま森の遊

学舎」を運営・活動する遠藤隆吉さんは、すべての構造材に県産材を使用する家づくりを展開している。そして、このことに興味のある人や、実際に遠藤さんの設計で建築することが決まったお客様を、遠藤さんは決まって福島県の森に案内しているのだった。

「家づくりに使う木を、実際に見て欲しいですから」

遠藤さんがなぜ、福島の木を使うようになったのか。そこには、和紙との偶然の出会いがあった。「10年ほど前、ドライブ中に安達町で偶然、和紙工房に立ち寄ったのがきっかけです。素晴らしい技術と素材がこんな近くにあるのに、安易にカタログの中にだけ材料を求めていた自分に気付かされました。それ以来、地元の自然素材を積極的に用いていこうと決めたのです」以来、木材や漆喰など、地元産の素材や手法を住まいづくりに積極的に使用しているという。

遠藤さんには、家づくりに一つの信念がある。「私は、家の中に物語（ストーリー）を持ち込みたいと思っています。例えば一本の柱にしても、どこで伐採されたかも分からないようなものでは、そこには何のストーリーも生まれませ

家づくりにあたって建築家・遠藤隆吉さんは、施主さんとともに何度か田島の山へ分け入った。家づくりに使う材料の木がどんなところから切り出されるのか、そのルーツを自分の目で確かめてもらうためである。写真は「めいちゃんち」に使用する樹を前にして。

ん。もし、それが〇〇産のものであると分かっていたら、何でそれを使うようになったかとか、それを使うことが決定するまでの経緯、それに込めた思いなど、そこから様々なストーリーが生まれます。建築家は、そのための枠組みをつくるのが仕事だと思いません。施主がその枠の中に自分たちの夢や記憶を埋めていき、最終的に具現化したものが『家』であるとは私には考えていません。そのために、最も身近な地元の材料を採用しています」。遠藤さんのこの考えに共感・賛同した施主様ご家族が設計を遠藤さんに依頼。遠藤さんは「めいちゃん」を主人公にこの家を設計した。それが「めいちゃんちの星見台」である。ちなみに、「星見台」とは施主様の趣味である天体観測が行えるようこの家に設けられたスペースである。

遠藤さんはこの家の大黒柱



一本の木から生まれる
様々な物語(ストーリー)を大切に
にしたいと考えています。

遠藤隆吉さん、建築家。「ふくしま森の遊学舎」を運営・活動している。

に、田島の山中で見つけた一本の木を幹をそのまま使用した。現地では、田島町の(株)加藤建材の加藤雅之社長と日光木材

南会津に二人の林業家を訪ねて

加藤さんと大嶋さんは現在、地元・田島の林業の活性化と産出される木材の積極的運用に取り組んでいる。元々田島町は町の90%を山林が占める林業の町であり、田島町民の六割が林業に携わっていたという。しか

の大嶋仁さんの二人が伐採担当で参加した。では次に、山林の木々を伐採する現場の意見を紹介する。

し、海外から安価な木材が大量に輸入されるようになると、高価な国内産木材の需要は一気に低下、この町の基幹産業であった林業は衰退していった。現在のこの町で林業を生業としている人は、1%にも満たない程に激

減してしまった。加藤さんはその原因についてこう語る。

「田島は自然のきれいな所です。しかし、山

にはそれなりに起伏があつて手入れが難しい。山裾は谷になつ

ているから、間引きした木は

谷底の川へ落とすしかない。そうならば、川から木を引き上げるためのロープや人手が必要になり費用がかさむ。ところが今、スギの成木の値段は苗木の値段



この家の主人公「めいちゃん」。

と変わらないんです。このような状態では、林業は成り立ちません」
伐採を担当する大嶋さんは更に深刻だ。
「タダで木を貰ったとしてもそんな値段でしか売れないから、伐採に関わる経費の分だけ売上がマイナスになってしまう。だから、誰もそんな手間をかけなくなってしまう。その結果、民有林の約九割が手付かずのままなんです」

また、この町の林業不振の原因はこれだけではないと加藤さんは言う。

「この付近のスギには、木の赤み部分が多くなるものが多

いんです。『黒芯材』といって、この辺りや熊本県阿蘇で特に多く見られるものなんです。これが今の日本人には好まれない。しかも、阿蘇のスギは黒芯が強く現れることを逆手に取って商品化に成功しているのに対し、この付近のスギは黒芯が顕著に現れないので商品化もしにくい。だから、伐採しても売れ残ってしまうんです」なお、黒芯材は「葉枯らし」という方法を施すことで黒い渋が抜けることが分かっているが、6ヶ月前後放置しておかねばならず商品化までに時間がかかるのも問題であるらしい。



「めいちゃんちの星見台」のシンボルである、

山林が果たす役割の現状

ここで、山林が持つ役割や機能について説明しよう。山林には人の手が加えられていない「天然林」と、人が植林をして育ててきた「人工林」がある。日本の山林の約四割がこの人工林であり、そのほとんどが成長が早いという理由で植えられたスギやヒノキの針葉樹である。本来、山林には水を蓄える水源かん養機能、土砂崩れや地滑りを防ぐ治山治水機能、地球温暖化防止機能など様々な機能がある。私たちはその機能を楽しんで生きていくわけだが、一度でも人の手が入ってしまった人工林では、人が手を加え続けなければ山は崩れその果たすべき機能を失ってしまうのだ。さらに、『豊かな海は、豊かな山によつてつくられる』という言葉が示すとおり、山を壊すことはその山だけの問題に止まらず、川を通して下流に広がる海にま

で悪影響を及ぼすことになる。「この辺りの山が崩れないで『山』の形状を保つていられるのは、スギなどの針葉樹にナラやサクラなどの広葉樹が混在しているからです。もしもスギだけの山だったとしたら…。スギの根は浅いので簡単に地滑りを起こしたり、保水力の低さから水害が起きていたかもしれない」と加藤さんは言う。山や木や林の大切さを、私たちは思い出しつつある。そうしたなかで自然保護の観点から、自然には手を加えるべきではない、そのままの姿で残すのが最良であるという意見もある。けれどもふるさとの山と深い関わりを持ち、そこで暮らしてきた二人には、そうした意見にも異論があるらしい。「一部の人の中には、木を切ることで自体が悪、自然を破壊する行為と思っている人がいるよう



木の幹をそのまま利用した大黒柱。「めいちゃ

ですが、それは大きな間違いです。手を入れているのは、土砂崩れや地滑りなどを起こさず、みんなが安心して暮らせるようにするためです。一度山が崩れてしまったら、その崩れた山に森が再生するため数百年という長い時間が必要になります。自分の子供や後世のために崩れた山を残したくはない。そのためやっていることだということも、もっと皆さんに知ってもら

う必要がありますね」こうした役割を果たすものとしての林業。それを活性化するためのヒントは、地元材をもっと知ってもらおうことだ、と二人は言う。「地元材を使いたいと思って

いる人は結構いると思うんですよ。ちなみに、(福島県農林水産部の)アンケート結果では、県産材を利用してみたいという県民は98%もいるのです。でも、それがどこで手に入るか分から

ない。これでは消費が伸びるはずがありません。また、高血圧抑制やホルムアルデヒド除去効果など木材の効用も知られていないし、すべての面においてPR不足だと思っています」PRの対象は消費者だけとは限らない。工務店や官公庁の意識の向上も極めて重要である。「工務店の地元材に対する意識は決して高いとはいえないと思います。コストの問題があるため、かえって地元材を薦めないことが多いかもしれません。でも、それでは駄目なんです。工務店は、どれだけお客様の視点に立って仕事ができるかだと思います。お客様の願いをどれだけ叶えてあげられるか、その中で地元材を少しでも使っていただければと思います」



地元材を使いたいと消費者が思っても、工務店や行政にその気がなければ駄目なんです。

大嶋仁さん(日光木材、写真右)と、加藤雅之さん(株式会社加藤建材・代表取締役社長、写真左)。二人は輸入材を中心とした木材消費の現状に疑問を投げかける。林業の衰退はふるさとの山の荒廃をもたらすことにもなっているのだ。現在はそれぞれに田島町の林業再生と地元材の活用に関する積極的に取り組んでいる。

「地産地消」の家づくり

では、実際に現場で工事を担当する施工者はどう考えているのだろうか。「めいちゃん星見台」で施工を担当した弊社代表取締役社長・宗像剛に聞いてみた。

「これからは家づくりに『地産地消』の考え方を取入れていきたいと思っています」と宗像剛は答える。「『地産地消』によって地域経済が活性化することはもちろん重要なのですが、生産する側から消費する側まで、そ



「めいちゃんちの星見台」と名付けられたK様邸外観。

施主様と建築家の思いが一つになった魅力ある住まいをぜひご覧ください。

「めいちゃんちの星見台」～アークラボット完成見学会～

6/25(土)・26(日)

- 時間/ AM10:00～PM5:00 ●雨天の場合も開催します。
- 会場/郡山市八山田(カインズホーム郡山富田店東側・郡山北警察署そば)

れに携わるすべての人の心も豊かになることが大事だと考えています。それが本来あるべき『地産地消』の姿だと思っています。『地産地消』とは地元で生産されたものを地元で消費するという意味の言葉である。これは、地域経済の活性化はもちろん、消費者と生産者の心をつなぎ相互理解を深める試みでもある。宗像剛が考える『地産地消』の家づくりとは、①その地域で取れる材料を使うこと(その地域に最もふさわしい建築資材は、その地域の気候が育んだ材料である)②地域に育まれた伝統的な技術を家づくりの中に持ち込むこと(地場の建設業者が大工さんや左官さん、建具屋さんなど地域に息づく素晴らしい技術を、現代の住いづくりの中に積極的に取入れる)の二つである。

つになるという初めての経験を味わいました。これこそ、『地産地消』の家づくりの新たな試みだったと思います。さらにその先には何があるのだろうか。「トレイサビリティ(追跡可能性)の考え方を家づくりに応用しよう。これは、お客様がすべての建材の生産者や生産工程について知ることができるというものです。お客様に安心して住まいを取得していただくためにも、ぜひ実現したいと考えています」。今回の取材で『地産地消』の家づくりに対する様々な思いを聞いてきた。それは四者四様、微妙に異なっていたかもしれない。しかし、『地産地消』の家づくりはようやく始まったばかりだ。しかも、これは単なる「家づくり」ではない。「一本の木を何十年もかけて育てることの意味を考えて欲しい」この加藤社長の言葉の通り、『地産地消』の家づくりは住宅産業のひとつの姿でありながら、環境対策でもあり、林業や過疎化対策を含めた地域活性化策でもあるのだ。一つの幹から大きな枝葉が三つ、四つと広がる一本の大樹のように、『地産地消』の家づくりから、大きな夢が広がっていく。



LABOTTO ラボット

〒963-8026 福島県郡山市並木 2-1-1

TEL.024-995-5855

<http://www.labotto.com>

【営業時間】10:00～19:00

ラボットは「住まうコト・楽しむ」。を提案しています。新築・リフォームの設計・施工、インテリアやファブリック、ガレージにいたるまで、快適な暮らしのアイテムをたくさんご用意いたしました。

